



施設園芸技術指導士としての抱負

井村 亮介 福井シード㈱ 営業部 拡販課

私は2012年に福井シード㈱に入社。以来、施設園芸協会には大変お世話になり、様々な講座・展示会を通して勉強する多くの機会をいただきました。そのおかげで、2013年に施設園芸技術指導士の資格を取得することができました。名だたる他の施設園芸技術指導士の方々と比べて、私は未熟な若輩ものではあります、その資格に恥じぬよう日々研鑽を積んでいるところです。

私が勤務している福井シード㈱は、地元の福井県では種苗・農業資材などの卸・小売を行う、いわゆる「たね屋」として認識されている会社です。しかし、当社はそういった卸・小売業に加えて、種苗メーカーとしての機能も有し、全国展開を行っています。特にトマトに関しては、培養増殖による品種の提供を行っており、全国でも類を見ない特徴を有しています。私が所属する拡販課では、このトマトを中心とした展開を行っていますので、その内容についてご紹介させていただきます。

トマトの培養増殖と言いましても「一般的に採種可能で、実際に種で流通しているトマト品種に、なぜ“培養増殖”という難しそうな技術を用いているの？」と思われるでしょう。これにはもちろん理由があり、少々専門的な話になってしまうのですが、結論としては「種の品種にはないような特徴を持った品種を提供できる！」ということに尽きます。

種の品種というのは、その商品を開発する過程（育種）で、遺伝的な性質（味、形、耐病性など）を固定させる作業を必要とします。いわゆるF₁品種でも、両親に遺伝的に固定したものを作り出して用い、その親の性質を維持することで、子であるF₁品種を半永続的に同一な品質で提供することが出来ています。

しかし、実はこの育種する過程において、固

定された性質やF₁品種よりも優れた性質を持った品種というのが生まれることがあります。しかし、ある意味天才とも言えるその品種は一代かぎりです。

そこで、当社はこの優れた性質を持

つ天才品種をその能力のまま、なんとか生産者の方に提供できないかと考え、そこで行き着いたのが“培養増殖”という方法でした。

培養増殖というのは要するに自身と同じ個体を作りだすクローン増殖です。クローン増殖というと、怪しい物に感じる方もおられるかもしれませんが、そんなことはありません。サツマイモやジャガイモが種イモを通して増えていくのもクローン増殖ですし、果樹の世界ではほとんどが枝を接いで増やしていくクローン増殖です。

当社ではこの技術を通して品種を提供する中で、味に一番の力を入れています。当社の中玉品種「華小町」、「華おとめ」を中心としたトマト品種は、その食味の良さでは高い評価をいただいています。総合点ではF₁品種が優れていることが多いですが、当社はここだけは譲れないというポイントを絞った品種を育成しており、こと味に関しては自信を持ってお勧めしております。

私は施設園芸技術指導士という資格をいただいた以上、より良い農業の実現に向けて精一杯のお手伝いができたらと考えております。とくに、種苗メーカーという立場から、生産者・消費者が喜ぶ品種を提供し続けていくことによって、その役目を担っていきたいと思います。



華小町（福井シード）